

ハマフエフキの中間育成

仲盛 淳・鳩間洋一・村本世利朝*・仲原英盛

1. 目的

ハマフエフキ養殖用大型種苗(全長 50 mm)を種苗要望に応じ生産する。なお今年度の中間育成結果には大型化して配布した放流用 25 mm種苗も含まれている。

2. 方法

中間育成は、種苗生産回次 1~2 の種苗 30.4 万尾を用いた。飼育は屋内 50kL および 100kL の円形水槽を各 1 面に収容した。途中、放流用種苗として一部を取りあげ、残りを 50kl 水槽 6 面へ分槽し飼育を継続した。

給餌は各水槽に自動給餌機設置し、配合飼料を給餌した。飼育開始から平均全長 40 mm程度に成長するまでは中国産コペポーダを水槽当たり 1kg × 3 回/日あたえた。

底掃除は毎日行い、回収した斃死魚の計数を行うことで、生残数の推定を行った。

出荷時には手作業により小型個体と骨格異常魚の選別を行い、ベルトコンベアー式のフィッシュカウンターを用いて計数を行った。

3. 結果および考察

今年度の飼育結果を表 1 に示した。今回の飼育結果には大型化して配布した放流用種苗 106,595 尾が含まれている。飼育開始から 15 日目頃から 100kl 水槽で吻口付近の発赤やふらつき魚が見られ始めた。斃死魚を水産海洋研究センターに送り検査した結果、マダイイリドウイルス病であることが判明した。また、一部の個体はピブリオ病も発症していた。近年当センターでの一日当たりの給餌量が 3 ~ 15%与えているのに対して概ね魚体重の 8.8%程度であったが、平成肥満度が 24.1 ~ 32.9 であることや日中は一時間おきに給餌を行っており常に餌を与えている状態で、魚体腹部が常に膨満状

態であった。このことから餌の与えすぎによりイリドウイルス病やピブリオ病を発症したと考えられた。3 日間の餌止め、斃死魚の取り上げ、オキシテトラサイクリン散経口投与、給餌間隔の見直しを実施し約 1 ヶ月後には斃死が完全におさまった。この発症をうけ、その他水槽でも給餌量・方法の見直や飼育密度を下げたことでたことで異常遊泳行動や斃死等は観察されなかった。

表1 平成18年度ハマフエフキ中間育成結果

収容年月日	2006年6月14~17日	
水槽規模(開始時)	(kl)	50kl × 3 100kl × 1
稚魚収容数	(尾)	303,807
開始時収容密度	(尾/kl)	1,519
開始時平均全長	(mm)	26.8
飼育日数	(日間)	36
取り上げ尾数	(尾)	137,511
生残率	(%)	45.3
取り上げ全長範囲	(mm)	31.9-55.2

4. 参考文献

- 井上 顕,金城清昭,鳩間洋一.ハマフエフキの中間育成.平成 15・16 年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書.2006;35
- 南 洋一,鳩間洋一.ハマフエフキの中間育成.平成 15・16 年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書.2006;85
- 金田真智子,渡辺利明,鳩間洋一,上田美加代,井上 顕,杵山恵子,濱川薫,仲原英盛,村本世利朝.ハマフエフキの中間育成.平成 17 年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書.2008;85

*現所属:農業研究センター